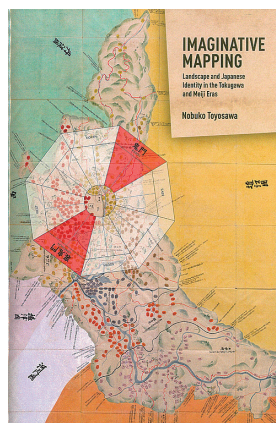


豊沢信子

『地理的想像——徳川・明治期日本の地誌と
アイデンティティ』Nobuko Toyosawa, *Imaginative Mapping: Landscape and
Japanese Identity in the Tokugawa and Meiji Eras*

片岡耕平

Harvard University Asia Center,
2019

まずは、全体の構成を紹介しておく。

Introduction

1. Local Topography in Seventeenth-Century Japan
 2. The “Country of the Deities”
 3. Mapping the Capital
 4. Transformation of the Spirits
 5. Philosophizing the Divine Country
 6. Geography of the Divine Nation
- Conclusion: Landscape and National History

Bibliography

Index

本書は、筆者の博士課程の研究の成果に基づいている。土地の様子を表現する書物・絵図版 (“Landscape”) が、大地そのものがそこに暮らす人々との結びつきに根差した帰属意識を育む思考の投影であるという理解を前提に、とりわけ江戸時代・明治時代に日本なるものをめぐる語りや、日本なるものへの帰属意識が生み出される際に、それがどのような役割を果たしたのかを明らかにする。十七世紀以降に活躍した学者や知識人の著作が分析対象になっている。

第一章では、江戸時代の『風土記』再評価の動きを追っている。寛文の『会津風土記』の編纂に関与した林鶯峰・山崎闇齋と『筑前国続風土記』を編纂した貝原益軒は、ともにその編纂方針を定める際に、八世紀に編纂された『風土記』に範をとった。彼ら十

七世紀の学者たちにとって、それが地域の歴史や風土を正確に記録するという目的に最も適っていたからである。但し、『会津風土記』は漢文、『筑前国統風土記』は仮名文と、その表記法は分かれた。十九世紀、権力強化を目論む幕府は、各藩に地誌の編纂を命じる。その際、基準とされたのは、益軒の『筑前国統風土記』であったという。日本独自の表記を用いることで、共同体への帰属意識を目覚めさせる効果が期待できたからと、その理由を指摘している。

第二章では、益軒の知的営為の内容を紐解き、『筑前国統風土記』に込められた彼の意図を浮かび上がらせている。儒教を下敷きにしてはいるものの、「氣」・「陰陽」・「鬼神」といった概念の理解には独自性があり、「神国」日本の中国に対する優位性を証明しようという意図が明確であるという。一方で彼は、学問分野で中国に劣っているという現実にも気づいており、教育の必要性を痛感していた。仮名文による記述という方法には、それを見越して採用されたという側面もある。最後に、林羅山の「神国」日本にまつわる言説を援用することで、同時代の知的営為に益軒の言説が占める位置を確認している。

十七世紀から十八世紀にかけて読書が一般化し、出版が商売として成り立つようになった。このような情勢を背景に、益軒は自らの見識を広く一般に伝えるために多くの旅行案内本を出版する。

第三章では、その一つである『京城勝覧』の内容を概観することで、旅行案内という手法を用いて彼が何を伝えようとしていたのかを浮き彫りにしている。単なる名所の羅列ではなく、国絵図の情報や陰陽道の知識に基づいて、ち密に計算された旅程と目的地を提示していることが明らかになる。「鬼神」に守護された京都周辺地域のあり様、ひいては、それを含んで外に広がる「神国」日本のあり様を読者・旅行者に実感させる工夫であったという。

これまでの三つの章で明らかになった事柄の一つが、中国由来の概念である「鬼神」に対する益軒独自の捉え方の存在であった。それを踏まえて、第四章では、この概念の、いわば日本化の様相に目を向けている。分析の対象に選ばれているのは、十八世紀後半の社会不安の高まりを背景に隆盛を極めた国学の言説である。

平田篤胤の『靈能真柱』を、彼が師と仰いだ本居宣長の言説との関係を意識しながら読み解き、神々による国土創成にまつわる説話が、どのように読みかえられているのかを分析している。「鬼神」の働きを明示しようという志向性が強い篤胤の言説は、西洋文化との接触機会が増える予感が膨らむ状況の中、彼の支持者たちを迷いなく「大和心」の鍛錬に向かわせるのに効果的であった。

第五章・第六章の主題は、明治時代の「神国」像である。第五章では、政治評論団体政教社の設立者の一人である三宅雪嶺の著作『哲学涓滴』と『真善美』を取り上げる。彼の思想形成に何が

影響を及ぼし、その結果、周辺のアジア諸国が西洋の帝国主義支配に浸食され続けているという現実を前にした彼が、日本のあるべき姿と特質をどのように思い描いていたのかを復元している。西洋哲学の合理性に根差した国家観・国際関係観と、それとは相容れない「気」の動きでその特質を説明する既存の国土観の混在が明らかになる。

第六章では、同じく政教社の志賀重昂の経歴を辿る。『南洋時事』に記録された南洋航海の経験は、人々の国土への愛着こそが、吹き荒れる西洋の帝国主義支配の嵐から日本を守る足がかりになるという着想を彼に与えた。『日本風景論』は、そんな彼の国土論である。そこで描き出されているのは、「気」や「鬼神」の働きによつて形作られる「神国」日本の姿ではない。地文学を用いた科学的な説明に徹する姿勢が特徴である。同書に収められた「日本国」図は、その立場から、日本の領土領有と領土拡張の正当性を表現したものと見る。

最後に、以上六つの章で論じてきた内容の相互関係と、それぞれに込められた筆者の意図が結論として記される。本書が、近代・近代社会において「神国」をめぐる言説が現実の地勢に重なり、日本の特質を表す中心概念へと成長した過程、言説と現実の関係性への関心に基づいて論を展開したものであることを確認している。

引き受けておいて言うのもどうかと思うが、最初、本書の書評依頼が私に來た理由が分からなかった。しかし、全てを読み終えた今、もちろん依頼者の真意は知るよしもないが、少なくとも自分なりに納得できる答えは見出せている。対象とする時代こそ違ふものの、本書で論じられている神国意識やナシヨナリズムの萌芽について論じたことがあるからである。

突然、自分語りを始めたのは、この経験こそが、本書に関して最初に指摘しておくべき点なのではないかと感じるからである。すなわち、本書の表紙には、『京城勝覧』所載の山城国図に方位図を重ねた加工画像を背景に上記の表題が掲げられており、この組み合わせから最初に受ける印象を基に、中で論じられている内容を思い描くのは簡単ではない。本書は英語圏の読者に売ること主眼を置いて作られており、英語圏の、日本に多少なりとも興味がある層を惹きつけるための仕様なのだと思う。しかし、私を含めて英語に明るくない人が多い日本では、それによつて損をすることになるかもしれない。本来なら手に取るべき人たちの目に留まらない恐れがある。

この場合、手に取るべき人たちとは、上記の概要紹介に名が挙がっている思想家・言論人に興味がある人たち、神国という概念の歴史的展開に興味がある人たち、そして列島社会におけるナシヨナリズムの形成過程に興味がある人たちを指す。これは、思

思想家論・神国論・ナシヨナリズム論として読まれるべき書であり、この種の議論に関わる人たちが、すべからず手に取るべき書である。

ナシヨナリズムそのものが、ネイション・ステイトの創成と軌を一にして生まれた近代の所産であることは間違いないにせよ、その成り立ちを前近代から説き起す手法は一般的なものと言えない^①。前近代のプロト・ナシヨナリズムは、①人種やエスニシティに基づく身体的特徴、②宗教、③一定程度継続する政治的実体に帰属してきたという実感、を核に形を成すとされる^②。列島社会で考える場合、①は除外しうるから、②・③が条件として残るのである。[「神国」]は、文字通り神にまつわる概念であるという点で②を、古代の国史『日本書紀』を淵源とする上に国土認識とも容易に結びつきうる点で③を、それぞれ満たしており、列島社会のプロト・ナシヨナリズムの鍵概念になりえたはずである。

本書が明らかにしたのは、江戸時代の思想家たちが、実際に[「神国」]をそのように利用する意図を持っていたこと、その影響はナシヨナリズムの育成に尽力した明治時代の言論人にも部分的に及んだこと、しかし最終的に近代知に根差した言説にとって代わられることであつたと言える。国際情勢や、それとも連動する知的営為を取り巻く状況の変化が巧みに織り込まれており、章ごとに分析対象を変える構成ながら、十七世紀から十九世紀にかけ

ての一貫した物語として読むことができる。

一方で、著名な思想家・言論人の経歴や言説を分析対象とする方法をとったがゆえの限界も指摘しておかなければならない。これは筆者自身も認めている(二六〇頁)問題点だが、彼らが自らの言説に込めた意図は明らかになつた反面、それが読者にどのように受け止められ、読者のどのような行動につながつたのかは明らかにされていない。

最も気になつたのは、思想家・言論人たちが提供する「気」の動き・「鬼神」の働きによつて現出する「神国」像は、それを受け取る読者をどれだけ惹きつけられたのかという点である。というのも、中世における神国は、神の守護によつて安寧がもたらされる国の意であり、生存という実利と直結していた。それと比べると、本書に登場する「神国」は、もちろん運氣の上昇などが関わっているとはいえ抽象度が高く、切迫感が薄い。

結局これは、中世と近世以降では、神が社会に及ぼす影響力がどう違つていたのかという問題になるであろうし、私が自分で引き受けねばすむのかもしれない。ただ、本書が積み残した読者の反応という問題に切り込む糸口は、案外こんなところにあるような気がするのである。

- (1) アントニー・スミス『ナショナリズムの生命力』（晶文社、一九九八年、高柳先男訳）、アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』（岩波書店、二〇〇〇年、加藤節ほか訳）、エリック・ホブズボーム『ナショナリズムの歴史と現在』（大月書店、二〇〇一年、浜林正夫ほか訳）など。
- (2) 前掲註(1)ホブズボーム書。